

## 男性の育児参加の規定因に関する研究

三浦さつき

福山大学大学院人間科学研究科

キーワード：男性の子育て，子ども観，仕事観

### はじめに

現代社会では、共働き世帯の増加や女性の社会進出に伴い、従来の「男性は外で仕事、女性は家で育児」の性別分業では育児が立ち行かなくなっており、近年、国をあげて男性の育児参加を促進する動きが見られている。企業や自治体では、育児休業制度や育児のための勤務時間短縮等の措置（短時間勤務制度、所定外労働の免除、始業・終業の繰上げ・繰下げなど）の制度を設けるなど、男性の育児参加への規定整備を進めている。しかしながら、そういった制度を利用することが一般的であるという風潮には至っていない状況である。例えば、厚生労働省（2010）の「平成21年度雇用均等基本調査」では、女性の育児休業取得率が85.6%であるのにたいし、男性の取得率は1.72%と2%に満たなかった。また、多賀（2006）は、「ミルクを飲ませる」、「おしめを替える」といった乳幼児の「世話」役割のほとんどが母親によって担われているとし、島崎・田中（2007）でも、子どもの“世話”（送迎、身の回りの世話、看病など）をするという、これまで母親が担ってきた領域への父親の関わりは依然少ないとしている。男性の育児参加が促進されているとはいっても、いまだに、子育てにおける負担は女性にかかりがちであるといえる。その結果、育児不安、育児ストレスを抱える母親も少なくない。柏木（2003）では、母親の育児不安を増大させる要因として母親の孤立、父親不在が挙げられている。子育てをしている女性は社会からの孤立感や疎外感を抱いており、子育てが孤立化してしまうことによって、負担感はさらに増大してしまうと考えられている。さらには、それらの心的疲労が引き金となり、虐待に繋がってしまうケースもみられる（中谷・中谷、2006）。「子どもを育てるのは女性である」という性別分業観や母性愛信仰、3歳児神話などが、このような問題に対して大きな影響を及ぼしているといえるだろう。

この問題を解決するには、父親が家事に参加すること、夫婦間のコミュニケーションをとること、そして、父親が子どもの面倒を見たり、子どもと交流を持ったりするというように、積極的に子育てに参加することが重要になってくる。平山（2003）では、妻の良好な心理状態を維持するうえで、夫婦が家事・育児に同等・平等に関わり、夫婦間で相互的・互恵的な情緒的ケアが行われることが重要であるということが示されている。育児に対する不安や不満を夫婦で共有することにより、母親のストレスも軽減されるであろう。また、父親の協力的関わりがもたらす効果はそれだけではない。尾形・宮下（1999）は、父親の家庭での協力的関わりが高く、かつ、母親の精神的ストレスが低い場合、子どもの社会性の発達が良好であることが明らかにした。加えて、協力的関わりをすることで、父親自身の成長発達が促進されるといった、父親の自己啓発的な効果もみられた。森下（2006）では、親になることにより、「責任感や冷静さ」が増し、仕事に対する積極性や自己研鑽など、さらなる自己実現に取り組むようになるとしている。そして、一日の大半を労働に費やし、地域社会とのつながりが希薄になりつつある成人男性にとって、育児は仕事以外の人間関係を広げる機会になっているという。また、金沢（2009）においては、父親が育児の主体者として子どもに関わることは、父親の人間的成長や家族のあり方について考えるいい機会になるとしている。

このように、父親が家庭に対して協力的関わりをもつと、母親の精神的ストレス、子どもの発達と適応、父親自身の変化をもたらすことが示唆され、子育てに父親が関わるということの重要性が示されている。

本研究では、小さな子どもをもつ男性の育児参加を促進する要因・阻害する要因を、量的、質的アプローチにより検討する。本報告は、子どもの状況、配偶者の状況、参加者（父親）の生育環境、仕事観、子ども観、性別

割観等の観点から、質問紙調査法にて明らかにする。

## 方法

### 参加者

F市内の幼稚園2園（C幼稚園、K幼稚園）と、保育園・所2園（S保育所、T保育園）に通う子どもをもつ父親336名（平均年齢=35.69,  $SD=1.96$ ）

### 調査期間

2009年8月に実施

### 回収率

C幼稚園67%, K幼稚園78%, S保育所36%, T保育園47%で、全体としては56%であった。

### 手続き

作成した質問紙を各幼稚園、保育園・所で配布・回収していただき、後日回収する留め置き方式で行った。

### 質問紙の内容

内容は大きく次の5つに分けられる。

(1) 子どもとの関わり：子どもの人数、子どもの性別、子どもの年齢、なつき具合（1. まったくなついていない～5. とてもなついていて、の5件法）、手がかかると感じるか（1. まったくない～5. たびたびある、の5件法）、平日・休日における子どもとの接触時間、食事・入浴・着替え・遊び・送迎・園での行事の6つの各場面においてどの程度子どもと関わっているか（いずれも1. まったくしていない～5. よくしている、の5件法）、福丸・無藤・飯長（1999）の子ども観尺度（22項目、1. まったくそう思わない～5. とてもそう思う、の5件法。得点が高いほど子どもに対してポジティブな印象をもっている）

(2) 回答者自身の子ども時代：当時の家族構成、主な養育者、父親の家庭内における実権の程度（1. とても弱かった～5. とても強かった、の5件法）、父親と接触頻度・母親との接触頻度（いずれも、1. とても少なかったと思う～5. とても多かったと思う、の5件法）、小さな子どもとふれあう機会の有無（1. まったくなかった～5. よくあった、の5件法）

(3) 配偶者について：配偶者の職業、配偶者の年収、配偶者から家事を手伝うよう言われることがあるか・配偶者から育児を手伝うよう言われることがあるか（いずれも、1. まったくない～5. よくある、の5件法）、配偶者は男女平等的な意識が強いと思うか（1. とても弱いと思う～5. とても強いと思う、の5件法）

(4) 回答者自身について：年齢、現在の家族構成、育児について相談できる同性の友人（パパ友）の有無、育児をするうえでの目標・モデルの有無、目標・モデルにしている人物が誰であるか、鈴木（1994）の脱男性役割態度スケール（SARLM）（10項目、1. まったくそう思わない～5. とてもそう思う、の5件法。得点が高いほど伝統的な男性像に縛られていない）

(5) 仕事について：職業、年収、役職についているか、役職名、通勤時間、労働時間、月間休日数、休日について（平日か・土日か・不規則か）、子どもが病気になったとき休みを取れる雰囲気職場にあるか（1. まったくない～5. ある、の5件法）、職場の育児休業制度は整っているか（1. まったく整っていない～5. とても整っている、の5件法）、育児休業についての職場の雰囲気（1. とても取得しにくい～5. とても取得しやすい、の5件法）、福丸ら（1999）の仕事観尺度（22項目、1. まったくそう思わない～5. とてもそう思う、の5件法。得点が高いほど仕事に対してポジティブな印象をもっている）

なお、回答したくない内容については無回答でもかまわない旨をアンケートに表記した。

## 結果

## 子どもとの関わり

子どもの人数は平均2.00人 ( $SD=0.66$ ) で、性別は「男のみ」が32.84%、「女のみ」は25.37%、「男女ともいる」は41.79%であった。また、各家庭の長子、末子の平均年齢を算出すると、長子5.92歳 ( $SD=2.87$ )、末子2.90歳 ( $SD=1.82$ ) であった。子どもとの接触時間の平均は、それぞれ、平日2.58時間 ( $SD=2.24$ )、休日10.98時間 ( $SD=5.02$ ) となった。6つの各場面でのどの程度関わりをもっているかは、図1に示した。食事、着替え、送迎の“世話”項目にてわずかながら値が落ち込んだ。これは先行研究(多賀, 2006; 島崎・田中, 2007)を支持するものであったが、入浴、遊び、行事参加との差は大きくなかった。なお、この6つの項目の得点を合計し、育児全体得点とした。育児全体得点の平均は30点満点中20.53点 ( $SD=5.13$ ) であった。

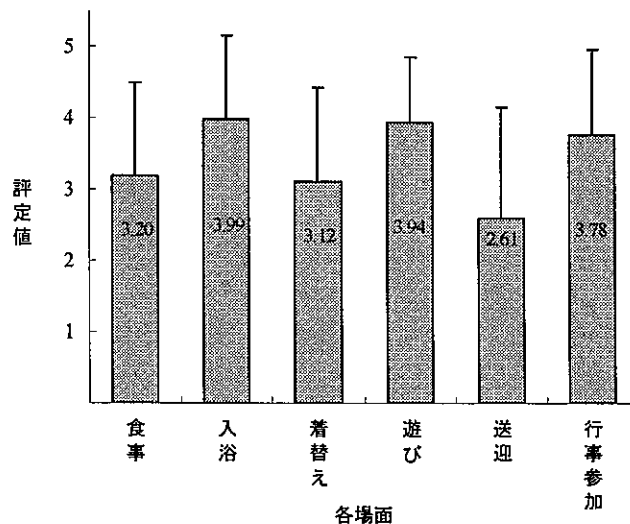


図1 「6つの各場面においてどの程度子どもと関わっているか」各項目の平均 (SD)

子ども観尺度を因子分析した結果(表1)、「子どもは自分の人生を豊かにする」、「子どもは自分の人生に充実感をもたらす」などの項目を含む充実・楽しみ因子、「子どものために自分の行動がかなり制限される」、「子育ては自分の自由な時間を奪う」などの項目を含む制約・負担因子、「自分にとって子どもはあまり大きな価値を持たない」、「子どもを育てることにあまり興味が持てない」などの項目を含む無関心・低価値因子、「子どもを持つのは人間として人間として自然なことである」、「子どものいない人生はむなしい」などの項目を含む社会的存在因子、「子どもは自分にとって生きがいである」、「自分にとって何よりも大切なのは子どもである」で構成される生きがい因子の5因子が抽出された。各因子を構成する項目の平均値をみても、充実・楽しみ因子、生きがい因子において得点が高く、標準偏差が低い。よって、多くの父親は、子どもは充実感や楽しみを与えてくれ、その存在は生きがいであると考えていることがわかった。また、無関心・低価値因子を構成する各項目の平均点は低く、標準偏差も低かった。多くの父親は子どもへの興味・関心が高いようである。

### 回答者自身の子どもの時代

主な養育者は、母親63.50%、父親15.03%、祖父母12.58%、両親7.36%、きょうだい6.1%、その他9.2%であった。父親に実権では、「弱かった」、「どちらかといえば弱かった」と回答した24.15%、「どちらかといえば強かった」、「強かった」と回答したのは68.21%、「弱くも強くもなかった」と回答したのは22.53%であった。

### 配偶者について

配偶者の職業は、専業主婦39.46%、パートタイマー29.22%、会社員21.39%、公務員3.31%、自営業2.71%、

その他3.92%となった。配偶者の男女平等意識については、「弱いと思う」、「どちらかといえば弱いと思う」と回答したのは25.15%、「どちらかといえば強いと思う」、「強いと思う」と回答したのは31.52%であった。

表1 「子ども観尺度(福丸ら, 1999)」の因子分析の結果

	平均	SD	因子				
			1	2	3	4	5
5 子どもは自分の人生を豊かにする	4.53	.75	.811	-.079	-.484	.210	.367
6 子どもは自分の人生に充実感をもたらす	4.45	.76	.792	-.154	-.480	.196	.440
2 子どもは心の支えである	4.61	.62	.701	-.214	-.311	.099	.648
1 子どもを見てると元気づけられる	4.59	.61	.699	-.199	-.345	.014	.496
4 子どものおかげで自分も成長する	4.42	.80	.661	-.090	-.214	.193	.227
3 もっと子どもに関わりたいと思う	4.38	.76	.632	-.340	-.352	.055	.437
22 自分がいなくても子どもは育つ	2.65	1.17	-.241	.210	.239	-.113	-.236
8 子どものために自分の行動がかなり制限される	3.04	1.19	-.130	.847	.350	.068	-.244
7 子育ては自分の自由な時間を奪う	2.97	1.18	-.210	.813	.367	.087	-.373
9 子どもは自分の人生の多くの部分を奪う	2.04	1.10	-.299	.617	.564	-.036	-.305
12 子どもから解放されたいと思う	1.94	1.00	-.308	.593	.556	.111	-.286
10 子どもを持つことは経済的な負担が大きい	3.43	1.23	-.079	.428	.171	-.004	-.159
20 自分にとって子どもはあまり大きな価値を持たない	1.35	.69	-.501	.219	.699	-.094	-.423
19 子どもを育てることにあまり興味が持てない	1.56	.76	-.415	.260	.647	-.052	-.277
11 子どもを持つと精神的に休まらない	1.97	.97	-.302	.509	.633	.037	-.280
21 子どものために仕事が満足にできない	1.50	.84	-.129	.293	.532	-.016	-.151
14 子どもを持つのは人間として自然なことである	3.61	1.21	.168	.031	-.121	.715	.128
16 子どものいない人生はむなし	3.65	1.22	.086	-.114	-.121	.614	.294
13 子どもを持って初めて社会的に認められる	2.25	1.24	.085	.124	.227	.546	.090
15 社会を担う次世代育成のために子育ては大切だ	4.20	1.02	.219	.066	-.104	.520	.115
18 子どもは自分にとって生きがいである	4.27	.82	.542	-.365	-.445	.176	.755
17 自分にとって何よりも大切なのは子どもである	4.19	.94	.331	-.203	-.237	.177	.664
	累積寄与率		24.857	34.991	40.972	44.962	47.662

表2 育児をするうえでモデル・目標としている人物

パーセンテージ	例(カッコ内は人数)
身内 58%	父親(13), 両親(9), 配偶者の親(1), 配偶者(1), 祖父母(1), 母親(1), 義兄(1), 姉夫婦(1) 他
身近な人物 26%	友人(6), 会社の先輩・上司(4), 知人(2), 友人の親(1)
芸能人・文化人 12%	浅井健一(1), 佐藤弘道(1), 水道橋博士(1), 所ジョージ(1), 仲村トオル(1), 松居和(1)
その他 4%	チャールズ・インガルス(1), 自分が素敵だ・感動したと感じた人すべて(1)

表3 脱男性役割態度スケール(SARLM:鈴木, 1994)の各項目の結果

項目	平均点	SD
(1) 男性は精神的にも肉体的にもタフで強く、自信を持っていなければならない (R) <sup>a)</sup>	2.30	1.08
(2) 男性は弱音をはいたり涙を人に見せたりしてもよい	2.94	1.09
(3) 男性は結婚する以上妻子を養う義務がある (R)	1.69	.90
(4) 男性も、働く女性同様、仕事と家庭の両立をはからなければならない	3.62	.09
(5) 男性が家事をすると男らしくなくなる (R)	3.95	1.06
(6) 男性は家事に参加することで、家族の一員としての意識が高まる	3.27	1.11
(7) 男性の成功をはかる最大のものは経済力である (R)	2.80	1.10
(8) 男性が家事に参加すると主婦の立場が理解しやすくなり、たがいに平等な関係を持ちやすくなる	3.51	.97
(9) 喜んで家事をするような男は軟弱である (R)	4.32	.90
(10) 同性愛の友人を持つことに抵抗はない	2.57	1.21

a) (R)は逆転項目

回答者自身について

育児について相談できる同性の友人がいると回答したのは 60.54%であった。目標・モデルがいると回答したのは 16.52%で、その内訳は表2に示す。また、表3は SARLM の各項目の平均点である。SARLM の各項目の合計点 (50 点満点) は平均 30.97 点 (SD=4.51) であった。

仕事について

回答者の職業は、会社員 75.68%、自営業 13.07%、公務員 7.60%、その他 3.65%であった。通勤時間は、30 分未満 60.37%、30 分～1 時間以内 33.44%、1 時間～1 時間 30 分以内 3.41%、1 時間 30 分～2 時間以内 2.17%、2 時間以上 0.62 となった。労働時間は、8 時間以上 78.77%、7 時間～8 時間未満 17.54%、5 時間未満 2.15%、6 時間～7 時間未満 1.23%、5 時間～6 時間未満 0.31 となった。月間休日数は平均 6.85 日 (SD=2.31) で、休日の形式については、土曜・日曜が 68.59%、曜日不規則が 21.15%、平日が 10.26%という結果だった。職場において育児休業制度が整っているかでは、「どちらかといえば整っている」、「整っている」と回答したのは 31.89%で、育児休業を取得しやすい雰囲気職場にあるかどうかでは、「どちらかといえば取得しやすい」、「取得しやすい」と回答したのは 12.26%であった。

仕事観尺度を因子分析した結果 (表 4)、「仕事は自分の人生を豊かにする」、「仕事は人生に充実感をもたらす」などの項目を含む充実・自己実現因子、「仕事は自分の自由な時間を奪う」、「仕事は家族と関わる時間を奪う」などの項目を含む制約・負担因子、「自分にとって何より大切なのは仕事である」、「家族のことより仕事を優先させたい」などの項目を含む仕事中心因子、「仕事をするのは社会的義務である」、「仕事をするのは社会への貢献である」で構成される社会的意義因子、「仕事の目的は経済的に家族を支えることである」、「安定した仕事についていることは重要である」で構成される安定因子、「仕事をしないですむならそれに越したことはない」、「働くからには昇進したい」で構成される消極的因子の 6 因子構造となった。

表 4 「仕事観尺度 (福丸ら, 1999)」の因子分析の結果

	平均	SD	因子						
			1	2	3	4	5	6	
2 仕事は自分の人生を豊かにする	3.67	.99	.870	-.161	.377	.275	-.084	-.288	
1 仕事は人生に充実感をもたらす	3.65	1.02	.791	-.156	.335	.290	-.111	-.286	
4 仕事は自己実現の場である	3.32	1.05	.680	-.061	.450	.240	.022	-.390	
5 仕事は自分にとって生きがいである	2.85	1.13	.677	-.135	.611	.375	.010	-.376	
8 仕事を通して自分が成長する	4.12	.85	.631	-.116	.230	.270	.060	-.407	
6 自分にとって仕事はあまり大きな価値をもたない	3.63	1.08	-.584	.275	-.316	-.206	.062	.521	
3 仕事で頑張るには家族の理解が大切である	4.26	.85	.548	-.027	.234	.268	.210	-.200	
9 仕事をしない人生はむなし	3.71	1.16	.480	-.100	.339	.347	.047	-.393	
7 仕事とうまくいくことは子育てにも良い影響を与える	3.76	1.01	.460	-.076	.207	.300	.207	-.325	
11 仕事は自分の自由な時間を奪う	2.88	1.19	-.068	.914	-.056	.009	.208	.173	
10 仕事は家族と関わる時間を奪う	2.70	1.14	-.066	.795	-.011	-.022	.147	.073	
12 仕事は人生の部分を奪う	3.24	1.21	-.269	.762	-.040	-.098	.230	.416	
14 自分にとって何より大切なのは仕事である	2.02	1.00	.250	-.075	.758	.211	.023	-.083	
15 家庭のことより仕事を優先させたい	2.30	1.07	.318	.075	.752	.320	.091	-.083	
16 仕事のためなら帰宅時間が遅くなくても仕方がない	3.23	1.16	.382	-.045	.532	.339	.204	-.308	
17 仕事をするのは社会的義務である	3.67	1.10	.281	.001	.348	.884	.250	-.233	
18 仕事をするのは社会への貢献である	3.50	1.07	.451	-.135	.363	.801	.060	-.305	
19 仕事の目的は経済的に家族を支えることである	4.30	.80	.038	.131	.099	.098	.714	.078	
20 安定した仕事についていることは重要である	4.35	.83	.020	.159	.061	.182	.576	-.159	
13 仕事をしないですむならそれに越したことはない	2.87	1.37	-.423	.425	-.227	-.234	.159	.477	
21 働くからには昇進したい	3.41	1.22	.327	-.135	.391	.161	.193	-.467	
22 生活費を得られれば仕事の内容にはこだわらない	3.40	1.25	-.069	.024	.087	-.029	.021	.319	
			累積寄与率	23.535	34.119	40.103	44.961	48.634	50.968

重回帰分析の結果

育児全体得点を従属変数とした重回帰分析 (ステップワイズ法) を、子どもとの関わり、仕事について、配偶

者との関わり、回答者自身（子ども時代も含む）の4つの分野に分け、それぞれ実施した（表5）。その結果、子どもとの関わりでは、「子どもが自分になつている」( $\beta=.428, p<.01$ )、「子どもに対して制約・負担を感じている（子ども観尺度、第2因子）」( $\beta=.107, p<.05$ ) があらわれた。仕事については、「仕事中心である（仕事観尺度、第3因子）」( $\beta=-.289, p<.01$ )、「子どもが病気をした際に休みを取れる雰囲気職場にある」( $\beta=.199, p<.01$ )、「年収が高い」( $\beta=-.124, p<.05$ ) が有意であった。配偶者との関わりでは、「配偶者の年収が高い」( $\beta=.225, p<.01$ )、「配偶者に家事を手伝うように要求されることがある」( $\beta=.185, p<.01$ ) がみられた。回答者自身では、「伝統的な男性像に縛られていない（SARLM得点）」( $\beta=.229, p<.01$ )、「子どものころ、自分より小さな子どもとふれあう機会があった」( $\beta=.149, p<.01$ ) が影響力をもっていた。

表5 育児全体得点を従属変数とした重回帰分析の結果

		偏相関係数	標準 偏回帰係数	モデルの評価 $R^2$	F値
子ども	子どものなつき具合	.417	.428	.168	31.964
	制約・負担感	.114	.107		
仕事	仕事中心	-.298	-.289	.138	15.893
	子どもの病気と休み	.210	.199		
	年収	-.132	-.124		
配偶者	配偶者年収	.259	.255	.101	18.698
	家事要求	.192	.185		
男性	SARLM得点	.229	.229	.083	14.733
	小さな子どもとのふれあい	.151	.149		

同様に、平日における子どもとの接触時間を従属変数とした重回帰分析（ステップワイズ法）を行うと（表6）、子どもとの関わりでは、「子どもが自分になつている」( $\beta=.187, p<.01$ ) が、仕事については、「労働時間が長い」( $\beta=-.348, p<.01$ )、「年収が高い」( $\beta=-.229, p<.01$ )、「休日数が多い」( $\beta=.154, p<.05$ )、「仕事に対して社会的意義を感じている（仕事観尺度、第4因子）」( $\beta=-.120, p<.05$ ) があらわれた。配偶者との関わりでは、「配偶者の年収が高い」( $\beta=.320, p<.01$ ) が、回答者自身では、「育児をするうえでの目標・モデルがない」( $\beta=-.167, p<.01$ )、「伝統的な男性像に縛られていない（SARLM得点）」( $\beta=.151, p<.01$ )、「子どものころ、父親の家庭内での実権が強かった」( $\beta=.117, p<.05$ ) が有意な影響力をもっていた。

表6 子どもとの接触時間（平日）を従属変数とした重回帰分析の結果

		偏相関係数	標準 偏回帰係数	モデルの評価 $R^2$	F値
子ども	子どものなつき具合	.187	.187	.032	11.107
	労働時間	-.367	-.348		
仕事	年収	-.252	-.229	.265	21.242
	休日数	.176	.154		
	社会的意義	-.137	-.120		
	配偶者	配偶者年収	.320		
男性	子育て目標・モデル	-.169	-.167	.049	6.198
	SARLM得点	.153	.151		
	父親の実権	.119	.117		

## 考察

本研究は、男性の子育ての規定因について子どもの条件、仕事の条件、配偶者の条件、男性の条件から分析を試みた。

重回帰分析の結果、促進要因では、子どもに対して制約や負担を感じつつも、子どもが自分になつてくれているという意識を男性がもっていることや、職場が、子どものために休みを取ることができ、休日数が多いという労働条件であること、伝統的な男性像に縛られず、家事などを手伝うという家庭内での男女平等の意識があること、配偶者の年収が高いこと、子どものころの経験による影響を受けることが示唆された。阻害要因では、仕事を優先的に考える、あるいは、仕事することは社会的な義務であるという男性自身の意識、具体的な子育てモデルがないこと、そして、仕事が忙しく労働時間が長くなってしまふような厳しい労働条件のなかで就業していることが、男性の子育てを妨げていることが考えられる。

促進要因においては子ども、仕事、配偶者、男性のそれぞれの条件がすべてみられたが、阻害要因では子ども、配偶者の条件はみられなかった。言い換えれば、男性自身の意識改革や労働状況の緩和だけでなく、子どもと妻の状況というものが、男性の育児参加を促進する要因であることを示している。

近年は、男性の育児参加を促進するための、男性が育児に積極的に参加できるようにするための取り組みの強化も必要であろう。国や企業・自治体が男性の育児を促進する施策を行っていることは冒頭で記述したが、実際には制度だけが形として存在するだけで機能していない、あるいは、そういった取り組み自体が進んでいないのが実情ではないだろうか。本調査においても、職場の育児休業制度は整っているかをたずねたところ、「まったく整っていない」、「どちらかというと整っていない」が49.23%、「どちらかというと整っている」、「とても整っている」が31.89%と、半数近くの回答者が整っていないと答えている。さらに、育児休業をとることのできる雰囲気がある職場にあるかをたずねた項目では、「とても取得しにくい」、「どちらかというと取得しにくい」との回答が65.14%にもなった。なかには「女性であれば育児休業を取得できるが、男性では無理」と記述している者もいたほどである。

しかし、男性の育児休業の取得は男性の育児参加の眼目ではない。すなわち、育児は期間限定ではなく、育児休業が適用されない長い期間続くものである。男性が真に子育てを行う存在（care giver）になるためには（福丸、1999）、そういった制度とは無関係に男性が主体的に子育てに関わる条件が必要となってくる。その場合に、最も決め手となるのが、配偶者の条件である。本研究でも、男性の促進要因として配偶者の年収が挙げられた。これは、配偶者が就労していれば、あるいは、配偶者の年収が高ければ、男性の子どもに接する機会、時間が増加するということである。共働きであれば、配偶者に子育てを任せるわけにもいかず、自然と男性が関わらざるを得ない状況になり、さらに、配偶者が職場におけるポストを獲得すれば、配偶者の収入も増えてくる。つまり、女性が就労していること、ポストに就いていることにより、男性の子育てに対する時間的・精神的余裕が生まれると考えられる。

## 引用文献

- 福丸由佳・無藤隆・飯長喜一郎(1999). 乳幼児期の子どもを持つ親における仕事観、子ども観：父親の育児参加との関連 発達心理学研究, 10(3), 189-198.
- 平山順子(2003). 家族を「ケア」ということ——ケアの喜怒哀楽を左右するもの—— 柏木恵子・高橋恵子(編) 心理学とジェンダー 学習と研究のために 有斐閣 pp.24-30.
- 金沢恵子(2009). 男性の育児休業取得を可能にした要因——育児休業取得者のインタビューより妻の影響を中心に—— 日本ジェンダー研究, 12, 28-40.

- 柏木恵子(2003). 家族心理学——社会変動・発達・ジェンダーの視点—— 東京大学出版会
- 厚生労働省(2010). 平成21年度雇用均等基本調査 結果概要
- 森下葉子(2006). 父親になることによる発達とそれに関わる要因 発達心理学研究, 17(2), 182-192.
- 中谷奈美子・中谷素之(2006). 母親の被害的認知が虐待的行為に及ぼす影響 発達心理学研究, 17(2), 148-158.
- 尾形和男・宮下一博(1999). 父親との協力的関わりと母親のストレス——子どもの社会性発達および父親の成長—— 家族心理学研究, 13, 87-102.
- 島崎志歩・田中奈緒子(2007). 父親の生活実態と発達——就労・家庭状況、子育て関与との関連—— 昭和女子大学生生活心理研究所紀要, 10, 109-177.
- 鈴木淳子(1994). 脱男性役割態度スケール(SARLM)の作成 心理学研究, 64(6), 451-459.
- 多賀 太(2006). 性別役割分業が否定される中での父親役割 広田照幸(編著) リーディングス日本の教育と社会③子育て・しつけ 日本図書センター pp.117-128.

### 謝辞

本研究の実施にあたっては、研究参加者、千鶴幼稚園、神辺千鶴幼稚園、つくし保育園、千田西保育所の園長・所長ならびに保育士の皆様に多大な協力を得た。また、青野篤子教授には厚いご指導をいただいた。記して感謝いたします。



A study on men's participation in childcare

Satsuki Miura

This study examined the promotional and obstructive factors in men participating childcare. 336 fathers whose children went to 4 private nursery schools responded to the questionnaire asking to what degree they and their wives participate in childcare and work, who mainly took care of them in their childhood, their view of children and work, and their egalitarian attitudes. The result of multiple regression analysis indicated that men's participation was promoted by the wife's income, child's attachment to them, length of staying home or leaving the work place, egalitarian attitude, and their father's participation in childcare. It is important to foster not only men's participation in childcare but also women's participation in work.

(指導教員：青野篤子)

